

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 野起遺跡

- 経営体育城基盤整備事業潟地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2008

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 野起遺跡

- 経営体育成基盤整備事業潟地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2008

新潟県長岡市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、事業主体者の新潟県長岡地域振興局から委託を受けて長岡市教育委員会が行った、長岡市寺泊北曾根に所在する野起遺跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、県営経営体育成基盤整備事業地区に伴って、平成19年10月29日から11月16日に実施した。
3. 発掘調査にかかる経費は、事業主体者の新潟県長岡地域振興局と文化財保護部局側の長岡市が、費用負担契約に基づいて、事業費の負担割合と同様に、農家負担分以外の割合部分を新潟県長岡地域振興局が負担し、農家負担分は長岡市が文化財の国庫補助金などの交付を受けて負担した。
4. 発掘調査は、駒形敏朗（長岡市教育委員会）が文化財保護法上の発掘担当者となり、指名競争入札で受注した株式会社大石組の支援を受けて長岡市教育委員会が実施した。
5. 発掘調査で出土した遺物および測量図面、写真等の記録類は、長岡市教育委員会が保管している。
6. 本書は、駒形が竹部佑介、松井奈緒子の協力を受けてまとめた。また、加藤由美子（長岡市教育委員会）が最終編集を行った。本文の執筆は全員で分担してを行い、文末にそれぞれ執筆者名を記した。
7. 調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	長岡市教育委員会	教育長 加藤孝博
事務局	長岡市教育委員会科学博物館（館長 山星茂人）	
調査担当	長岡市教育委員会科学博物館 副主任 駒形敏朗	
事務担当	長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 加藤由美子	
現場支援	株式会社 大石組	（現場代理人 半藤幸男）

8. 発掘調査から本書の作成まで、次の方々から御指導、御協力をいただいた。ここに感謝申し上げます。

木島 勉　滝沢規朗　戸根与八郎　山岸洋一　相村組業　三島郡北部土地改良区  
新潟県長岡地域振興局（敬称略・50音順）

## 目　　次

1	遺跡の概要	1
2	調査の経緯	3
3	基本層序	3
4	遺構	5
5	遺物	6
6	まとめ	11
	引用・参考文献	

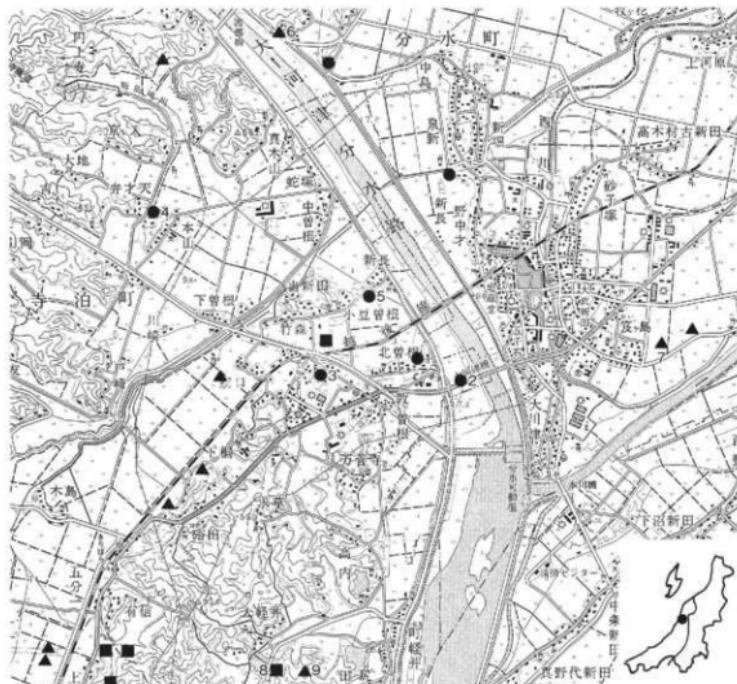
## 挿図・写真目次

第1図	野起遺跡周辺の地形と主な遺跡	
	(1/50,000)	1
第2図	野起遺跡周辺の遺跡群 (1/10,000)	2
第3図	調査トレンチ及び土層柱状図	4
第4図	遺構全体図 (1/200)	5
第5図	井戸 (1/60)	6
第6図	遺構出土遺物	7
第7図	包含層出土遺物 1	9
第8図	包含層出土遺物 2	10
写真1	調査風景及び遺物出土状況	
写真2	遺構発掘風景	

## 1 遺跡の概要 (第1図・第2図)

野起遺跡は新潟県長岡市寺泊北曾根に所在する、縄文時代晩期から古墳時代前期にかけて断続的に営まれた集落跡である。寺泊北曾根集落の東端に位置し、現況は水田・畑地及び宅地で、標高は約11mである。平成16年10月に旧寺泊町教育委員会が実施した、県営経営体育城基盤整備事業湯地区（以下、県営は場整備事業と略称）に伴う試掘調査により発見された。

寺泊地域周辺には東頭城丘陵、すなわち地元で言うところの「西山丘陵」が海岸線に沿って延びている。丘陵は三島郡出雲崎町のJR出雲崎駅付近で二股に別れ、一方は海岸部へ、一方は内陸部へと発達する。ここでは便宜的に前者を東頭城丘陵の「西側丘陵」、後者をその「東側丘陵」と呼び分ける。西側丘陵と東側丘陵の間には谷筋の清水を集めた島崎川が流れ、新潟平野方面へと北流する。その下流域にあたる現在の本山地区一带に、かつて円上寺湯という大きな湯跡が存在した。住時の島崎川は燕市分水付近で信濃川に合流していたが、水量・流速とも比べ物にならないほど大きな信濃川の流れがある種の堰のごとく作用し、この堰に跳ね返された水が、元々低地である下流域一带に慢性的に溜まるようになっていった。これが円上湯の始まりである。また、島崎川は両側を丘陵に挟まれていたため、信濃川以外に有効な排水ルート



第1図 野起遺跡周辺の地形と主な遺跡 (1/50,000 三条)

- |           |         |         |           |        |
|-----------|---------|---------|-----------|--------|
| 1 野起遺跡    | 2 五千石遺跡 | 3 横瀧山遺跡 | 4 本山舞台島遺跡 | 5 草薙遺跡 |
| 6 夕暮れの岡遺跡 | 7 上町遺跡  | 8 屋鋪塚遺跡 | 9 大久保古墳群  |        |

トが持てなかつたことも、円上寺渴誕生の要因のひとつと言わわれている。近代に信濃川治水の一環として大河津分水路の開削が行わると、それに伴い円上寺渴も干拓され、現在渴湖は跡形もない。

第1図は、野起遺跡が営まれていた弥生時代（■）、古墳時代（▲）、弥生と古墳の両時代（●）に存在した主な遺跡を示したものである。当然のことながら当時は大河津分水路が存在せず、変わりに水を静かに湛えた円上寺渴が野起遺跡の北西に広がっていた。寺泊地域の代表的な弥生時代の遺跡である本山舞台島遺跡は、円上寺渴の汀線付近の丘陵裾部に立地する。本山舞台島遺跡に限らず円上寺渴周辺の遺跡は、渴の汀線に面した丘陵裾部に立地する特徴がある。本山舞台島遺跡の北東2kmには、大河津分水路の工事中に古墳時代の子持ち勾玉と提瓶が出土した夕暮れの岡遺跡がある。提瓶と子持ち勾玉の存在は、この周辺に古墳が存在した可能性を示唆するものである。野起遺跡の北西700m、現在の小豆曾根集落の南端の自然堤防上に立地する草庵遺跡は、野起遺跡と同時に営まれた集落跡である。県営ほ場整備事業の計画予定地内にあり、事前の確認調査で弥生時代中期の小松式土器が出土し注目される。

寺泊地域における遺跡密集地のひとつが円上寺渴周辺の丘陵だとすれば、もうひとつは、野起遺跡が所在する北曾根集落、それに接する竹森集落付近であろう。東頸城丘陵の東側丘陵の先端部にあたり、またそれに連なるように良好な自然堤防が東西方向に発達したこのエリアでは、縄文時代晚期から古代に至る多くの遺跡が、第2図のように現在の集落と重なって分布する。県内最古の寺院跡で、発掘調査により埴仏や鶴尾が出土し話題を呼んだ横瀧山廬寺跡や、近年大河津分水路の工事で発見された古墳時代の集落跡である五千石遺跡、弥生時代中期に玉作で栄えた源訪田遺跡など、各時代を象徴するような遺跡が存在することもこのエリアの特徴である。海岸部からさほど遠くなく、かつ信濃川の左岸という立地条件から、海上交通と内水面交通の要所としての地位を担っていた可能性が高い。野起遺跡の南南西3.5kmには、弥生時代後期の方形台状墓が見つかった屋塚遺跡や、古墳時代前期の前方後方墳群である大久保古墳群があるが、これらの墳墓を造営した母村がどこにあるのかはまだ不明である。

（加藤）



第2図 野起遺跡周辺の遺跡群 (1/10,000)

## 2 調査の経緯

調査に至るまで 平成15年5月、新潟県長岡地域振興局(以下、事業者と略称)から寺泊町教育委員会(当時、以下、町教委と略称)に対し、寺泊本山地区を中心とした通称「湯地区」で計画されている県営育成体基盤整備事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、協議の申し入れがあった。事業は総事業面積305haを対象とした農地基盤整備で、農道・排水路・バイオラインの敷設、揚水機場の建設などを含む。町教委は事業計画図面等を検討し、事業地内に10箇所を越える周知の遺跡が所在することから、未周知の遺跡がさらに存在する可能性が高いと判断し、事業着手前の埋蔵文化財の試掘確認調査が必要である旨を事業者に伝えた。調査の方法や実施時期について更なる協議を重ね、5期に分けられた工事区域のうち、事業採択を受けた地区から順次試掘確認調査を行うことで両者が合意した。平成16年10月、町教委は平成16年度に事業採択を受けた湯1期地区(北曾根・小豆曾根・新長はか)の73.2haに対して試掘確認調査を行い、野起遺跡など2遺跡を新たに発見した。そのうち、遺物が多量に出土し、水路法線にかかる野起遺跡について、法線や工法の変更を含めて協議を重ねたが、計画変更是極めて困難であることから、工事着手直前に本発掘調査を行うことで両者が合意した。湯1期地区的面工事に先立つ平成19年10月16日、長岡市は事業者と野起遺跡の本発掘調査に係る費用負担契約を締結し、本発掘調査を開始した。  
(加藤)

調査の経過 野起遺跡の発掘調査は、県営は場整備事業の水路建設に伴うもので、幅1m、延長75mほどの水路部分を対象に実施した。平成16年10月に実施した試掘調査で、遺物包含層が南側の浅いところで水田面から60cm、深い北側で160mの位置にあることを確認していた。このため、は場整備事業請負業者が水路掘削工事として、調査前日までに遺物包含層までの土砂を取り除くことができ、発掘調査の省力化につながった。

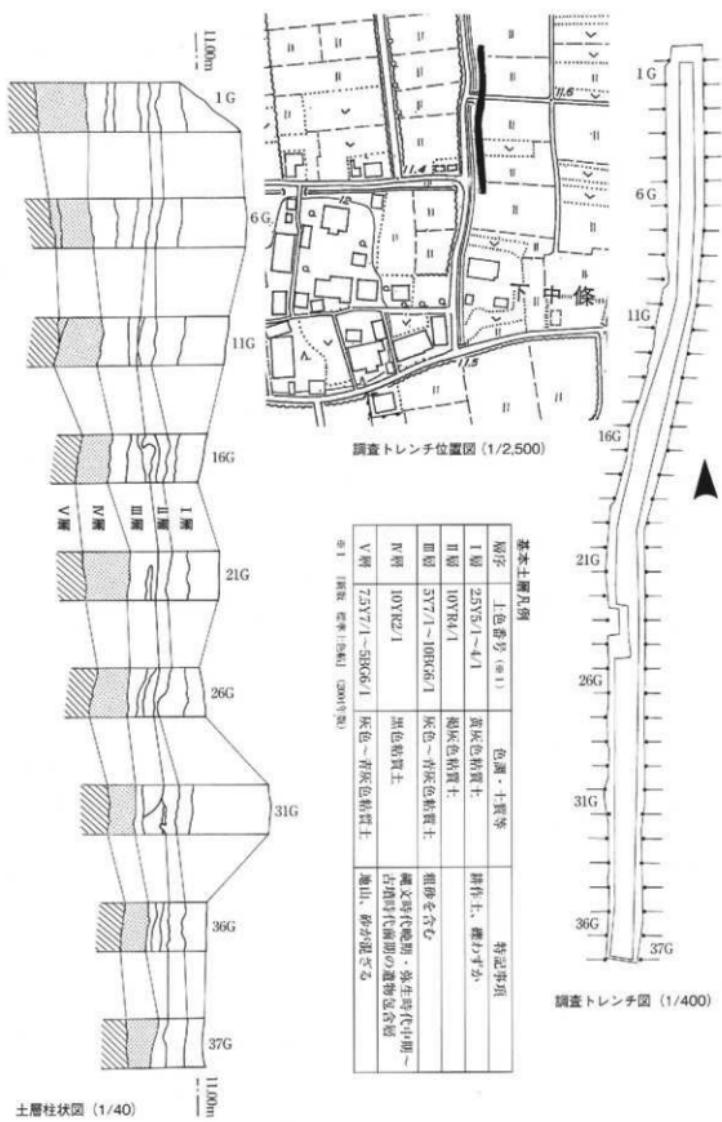
調査初日の10月29日に安全施設の設置、調査用グリッドの杭を打設する作業などを行い、30日から人力での発掘を始める。なお、調査地が水田であるため、発掘面が乾燥するように、調査トレンチの両脇に排水用の溝を設けた。発掘は北側から南側へと、包含層の発掘、遺構確認作業、遺構発掘などの手順で進めた。その間で、必要に応じて遺物出土状況や、遺構の土層断面の写真撮影それに図化作業などをした。

11月5日、27グリッドで弥生時代に特有の蛤刃を呈する磨製石斧や高壙、器台などが出土(写真1)。このころから、特に27グリッドから南にかけてのトレンチで遺物の出土量が多くなる。包含層の発掘は7日までには終わり、8日には遺構確認作業が終わる。確認した遺構は井戸、溝などである。

井戸の調査は、平面の半分がトレンチの西側にかかっていることや、深さが1m以上に達するため、作業の安全を期して次の手順で進めた。①井戸の覆土を若干掘り下げる。②井戸の平面を写真撮影、図化作業。③バックホーで井戸の東側を掘り下げ、底面や井戸の断面を確認する。そして、15日には深い井戸を安全のために埋め戻し、11月16日に調査機材などを撤収して調査を終える。  
(胸部)

## 3 基本層序(第3回)

上位からⅠ～Ⅴ層に大別することができる。現表土であり耕作土であるⅠ層を除き、Ⅱ層以下が自然堆積である。Ⅰ層は分層不明確な箇所もあったが、水田造営時に盛土された畦畔を含む。Ⅱ層は褐色灰色の粘質土であり粘性が強い。Ⅲ層は灰色から青灰色の粘質土層で、Ⅳ層以下の地形に合わせて性状が激しく変化する。比較的標高の低い調査区の北側では粗砂が混ざり、シルト質を呈する。Ⅳ層は黒色の遺物包含層である。粘性は強い。調査区の南側では層厚およそ20cmを測るが、地形の変化に沿って26グリッド付近から徐々に厚く堆積し、北端での厚さは約40cmになる。Ⅴ層は地山層である。Ⅲ層と同様に砂粒を含みシルト質を呈する。標高は調査区南端で10.40mを測り、北端で9.90mとなる。Ⅲ・Ⅳ層でも見られたように、北に向かって地形が下がっていく様子が確認できた。  
(竹部)



第3図 調査トレンチ及び土層柱状図

#### 4 遺構 (第4図・第5図)

ピット、溝、土坑、井戸を確認した。

ピット 28基あり、いずれも深さ15cm前後の単層で、柱穴となりそうなものは認められず、うち6基から遺物が出土した。

溝 15~24グリッドの間で4本確認した。2号溝は東西方向に伸びるが、それ以外はやや北西~南東方向に傾き、特に3号溝の傾きは大きい。幅は4号溝が約220cmと最も広く、2・3号溝は40cm前後。深さはいずれも10cm前後と浅い。1・4号溝の覆土は共に黒色粘質土の單層、2・3号溝は黒色粘質土と黒褐色粘質土の2層からなる。

土坑 35グリッドで検出。平面長方形で深さは15cm。覆土は2層の黒色粘質土である。

井戸 32・33グリッドの西壁面に西半分がかかる形で位置していた。古墳時代初頭から前期前半の井戸である。発掘作業中も絶えず水がしみ出しており、古墳時代にも湧水層に達していたと推測され、また形状からも井戸と考えられる。平面は直径約210cmの円形、断面は深さ約150cmの方形で、検出面からは直角に掘り込まれている。井戸枠は確認できず、素掘りの井戸であろうか。覆土は5層からなり、レンズ状に堆積する。最下部には黒色粘質土の5層が薄く広がり、この面が井戸の底部である。3・4層は地山と土質がよく似ており、壁面が崩壊し堆積したものと思われる。2層は地山と暗灰色粘質土が混ざる自然堆積で、上部は検出面から少しづつ流れ込んだような構造に、下部は地山がブロック状に混在する。1層からは、大量の土器に混ざって木片や種子などの植物遺体が多く出土しており、一時期、埋まり切らなかった井戸の底みに水が溜まっていたと考えられる。

井戸底近くの2層下部から、ほぼ完形の赤彩された高环(第6図12)が出土した。類例として、長岡市大武遺跡で古墳時代前期の井戸底から完形の壺が出土している。(松井)



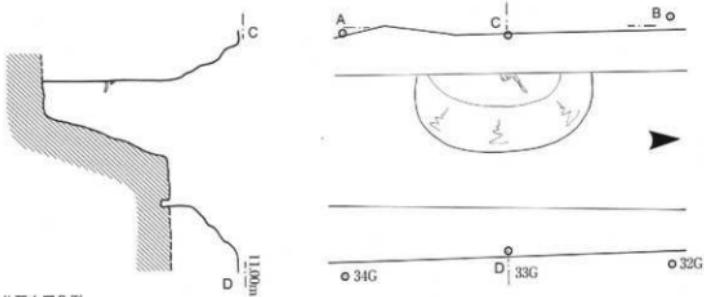
第4図 遺構全体図 (1/200)

## 5 遺物 (第6図・第7図・第8図)

コンテナで5箱分出土し、主体は土器である。井戸からは良好な一括資料が得られた。

**井戸 (第6図1~16)** 1層からまとめて出土し、一部は2層でも確認された。弥生時代中期から後期後半に該当する1~3を除き、概ね新潟シンボ幅年の6・7期に該当する。1は甕ないし壺の体部で、4本1単位の短線文を施す。2は凸帯を貼り付けた壺の頸部である。3はつまみ上げの大きい、くの字状の口縁を持つ北陸系の壺である。4~8は甕であり、6~8はコの字状の口縁を持ち、体部に明瞭なハケ目が残り、口縁から体部にかけて煤が付着する。9~11はいずれも平底の甕と壺の底部であり、11は中央が若干窪む。9は外面に煤、内面に焦げが付着し、器面の激しい荒れからも日常の煮炊具であろう。12~13は、2層から出土した鮮やかに赤彩が施された高坏である。坏部下半は直線的に短く伸び、上半が内湾しながら大きく広がる東海系の特徴を持つ。脚部に3か所の穿孔がある。内外面に密なミガキを施した非常に丁寧な作りで、他の高坏や器台と比べてもひときわ目を引く完形品である。14は口縁端部を垂直につまみ上げ受け部が内湾気味に立ち上がる器台で、外反気味の脚部に3か所の穿孔がある。15は穏やかに外反する器台の脚部で、内面には右回りに当てたハケの工具痕がはっきりと残る。穿孔は3か所と考えられるが2か所のみ残存する。16は砥石であり、一方に切断面を残し、反対側は折損している。なめらかな手触りの使用面は4面あり、灰白色の流紋岩製である。

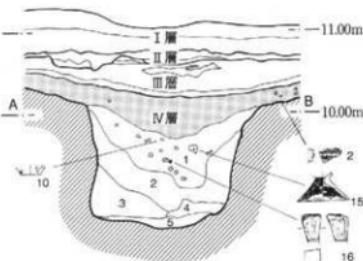
**ピット・溝・土坑 (第6図17~20)** 17は6号ピット、18は1号溝、19・20は土坑からの出土である。1~5号ピット、2~4号溝でも遺物が確認されたが、いずれも細片のため図化できない。17は弥生時代中期の壺の口縁で、端部内面に指で押されたような刻みを持つ。18は古墳時代前期の器台もしくは高坏の脚部である。19は弥生時代中期の甕の口縁で、端部内面に4本1単位の短線文が連なる。(松井)



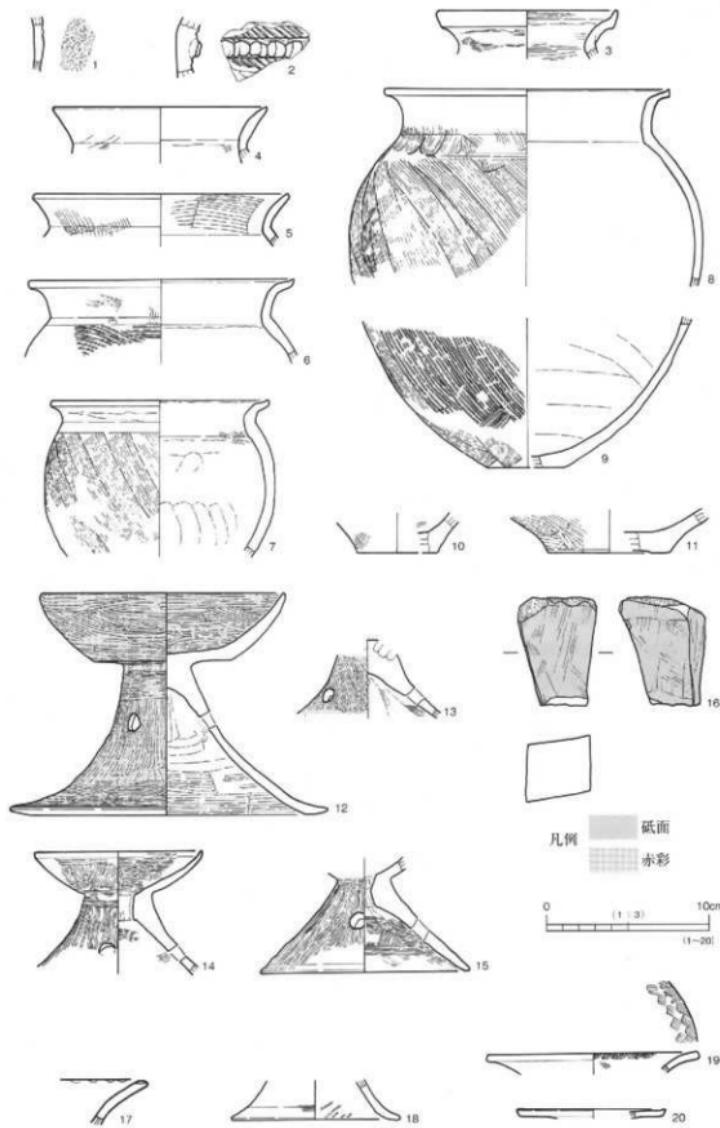
井戸土層凡例

層序	土色番号(6.1)	色調・土質等	特記事項
1	N3/	暗灰色粘質土	径5mmの青灰色ブロックわずか
2	N15/	黒色粘質土	青灰色粘質土の混ざりが多い
3	5BG6/1	青灰色粘質土	径5~10mmの黒色ブロックわずか、砂が混ざる
4	5BG6/1	青灰色粘質土	3期に比べてしまりが弱い
5	5Y2/1	黒色粘質土	径5~10mmの青灰色ブロックを含む

※1 「新版 標準土色表」(2004年版)



第5図 井戸 (1/60)



1~16: 井戸、17: 6号ピット、18: 1号溝、19・20: 土坑

第6図 遺構出土遺物

**包含層** (第7図・第8図) 包含層からは縄文土器・弥生土器・土師器・石器が出土し、土器は総量で約16kgであった。旧地形の変化に沿って、遺物の出土量も変化する。27グリッド以南では遺物の出土量が多く、北に向かうにつれて少なくなり、8グリッド以北は全く出土せず、遺構も検出されなかった。

21は、縄文土器の深鉢の胴部片である。上部は撚糸文を斜行させ、下部では縱走させている。

22～31は弥生土器である。中期から後期にかけての縄片が少量出土した。22～24は東北系で、22・24は地文に縱走するRL縄文が施される。22は横位に2条の沈線を巡らせて文様帯を作り出し、工字状の文様を充填する。23は甕か壺の口縁部である。端部を丸く納め、内面はナデ調整、外面は2条の沈線の間に横転させたS字を連ねて描く。天王山系に特有の交互刺突文が退化したものと考えられる。

25～31は北陸系のものである。25～27は甕または壺の胴部で、25は5条1単位の廉状文が施されている。26は6条1単位の櫛描文が横位に巡る。27は櫛描きによる波状文が見られ、文様と胎土から中部高地系の可能性も考えられる。28は、小松式に特徴的な口縁端部に刻みを持つ甕の口縁である。29は壺の口縁で、口縁部内面に刻みを施し、そこから外面にかけて赤彩される。30・31は口縁端部に綾杉文が巡る壺である。30は口縁端部に刻み、口縁内面に綾杉文を描く。外面全体と内面の綾杉文の部分は赤彩される。31は、口縁端部を断面四角形に肥厚させ、上面と外面の2面に綾杉文が施されている。

32～64は土師器である。甕・壺・高杯・器台がある。32～34は甕で、口縁部がくの字またはコの字に屈曲して開く。包含層からは縄片も含めて21個体の口縁部資料が出土したが、古墳時代前期の中でも古相を呈するコの字状のものが1個体しかなく、井戸跡一括資料に比べて若干新しい印象を受ける。32・33は口縁端部に内傾する面を持つ。32は端部を強く横ナデし、わずかにつまみ上げている。

壺と断定できる資料は35・36のわずか2点であり、甕に比べ個体数が少ない。35は口縁部外面に2本1単位の棒状浮文を6か所に貼り付けている。36(写真1-7)は大きく肩が張り、外面全体が密にミガキ調製される。出土遺物の中では丁寧なつくりである。ほぼ完形で倒壊した状態で出土した。

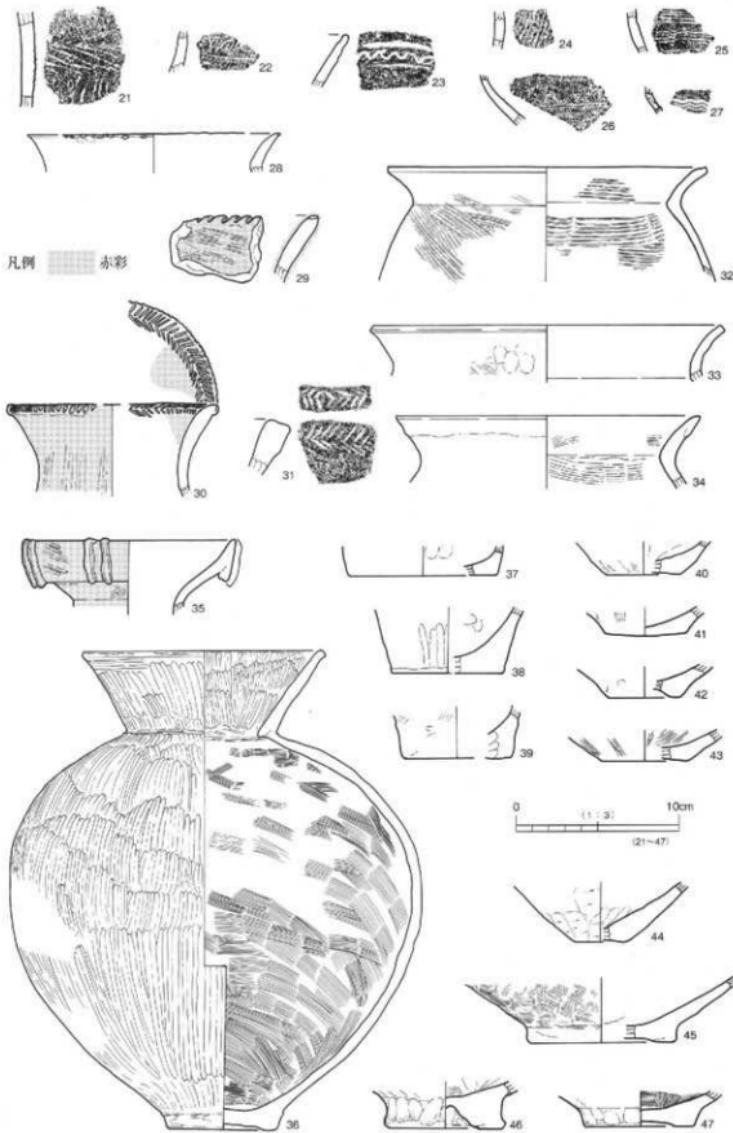
37～47は甕ないし壺の底部で、平底のものとドーナツ状に中心部をくぼませるもの2タイプがある。前述の36も含めて底部がわかる資料は18個体出土しており、ドーナツ状のタイプはその1/3を占める。

48～63は高杯と器台である。高杯・器台とも坏部・受部が楕円形のもの(48～50・54)が目立つ。脚部はいずれも外面に放射状の密なミガキが施されており、52(写真1-8)はその後斜め方向に粗いミガキ痕跡が残る。53は受部が浅い皿形を呈し、脚部の裾がわずかに内湾する。56は井戸跡出土の高杯(第6図12)と同様に、頸部外面に横方向のミガキ調整がなされる。57(写真1-9)は脚部が大きく外反し、裾が広がる。64は器台を模したと思われる手づくねのミニチュア土器の脚部である。

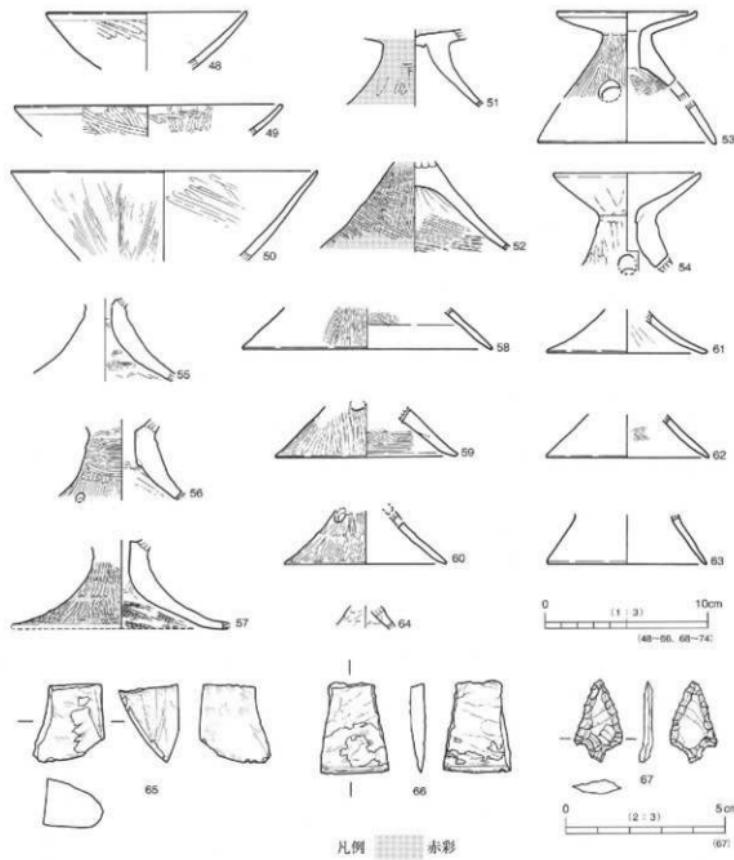
65～67は石器である。65(写真1-6)は輝緑岩製の大型蛤刃の磨製石斧で、基部を欠損し刃部のみ器体の約1/4が遺存する。重量77.3g。66は流紋岩製の石鏟で、遺物が最も集中する37グリッドから出土した。攻玉に使用されたと考えられるが、他に未製品等玉作関連資料は出土していない。刃部は両面から研磨され、側辺は欠損する。重量26.8g。67(写真1-5)は有茎の石鏡で、石材はチャートである。茎部先端を欠損する。左右非対称の二等辺三角形を呈し、左方下部にのみ返し状の突起を持つ。重量12g。

68～74は平成16年度の試掘調査で出土した土師器で、甕・壺・高杯・器台がある。68は短頭壺で胴部は肩の張らないものであろう。69～70は口縁がくの字に屈曲する甕である。69は口縁内面に横ナデによる緩やかな凹みを持つ。71は二重口縁壺の口縁で、外傾する口縁内部に明確な段を持つ。内外面は赤彩される。

試掘調査の資料も含めて包含層遺物の主体を成す土師器を概観すると、弥生時代後期に一定量含まれる北陸系の有段口縁の甕が見られないことや小型丸底壺が出土していないことから、小型丸底壺が定着する以前の古墳時代初頭から前期前半、新潟シンボ編年の6・7期を主体とする時間幅が想定できる。(竹部)



第7図 包含層出土遺物 1



第8図 包含層出土遺物2

## 6まとめ

野起遺跡の発掘調査は、幅約1m、延長約75mのは場の水路部分を対象に行った。調査では井戸1基、溝4本、土坑1基とピット数基の遺構群と、およそ2,400点の土器、石器、蛤刃の磨製石斧、玉作の工具である石鏡などの遺物を調査した。遺構や出土遺物から、野起遺跡は一般的な集落と考えられる。そして、野起遺跡で集落が営まれていた時期は、出土した土器から、古墳時代前期を主体として绳文時代晩期から弥生時代中期、後期と断続的ではあるが、野起を生活の場としていた痕跡が確認された。

今回の調査における遺物の出土位置などから、野起遺跡の集落跡は、4号溝付近から南側に展開するとと思われる。野起遺跡の北西側は、かつての円上寺湯が広がっていた地域で、調査地の地形も北西側に下がっている。このことも集落が南側に展開していたと考える根拠の一つである。

さて、今回の調査での注目されるものに、素掘りの井戸が挙げられる。古墳時代初頭から前期前半ごろに位置づけられる井戸は、直径約2m、深さ1.5mほどの規模で、井戸からは土器部、砥石などの遺物と、木材や植物種子などが出土した。新潟県内において野起遺跡と同じ古墳時代の井戸が確認されているのは、高山遺跡、津倉田遺跡（以上、上越市）、新潟市東園遺跡などがある。さらに、野起遺跡の近くでは、燕市教育委員会と長岡市教育委員会とが共同で発掘調査を進めている五千石遺跡4区で数基の井戸が、燕市教育委員会が平成19年に調査している。また、木製の井戸枠を持ち、底部に完形の壺があった古墳時代前期の井戸が、野起遺跡から近い長岡市（旧和島村）大武遺跡で発見されている。また、上越市子安遺跡は弥生時代後期末の井戸が確認されており、県内の井戸の中では最古の例である。野起遺跡の井戸は、新潟県内における弥生時代から古墳時代の井戸に、新たに1件の事例を加えた。

また、野起遺跡発掘調査で注目される出土遺物の一つに、玉作の工具と一般的に考えられている石鏡がある。石鏡以外に、玉の未製品や剥片など、玉作に関係する遺物は出土していないが、玉作に主要な工具である石鏡が出土したことは、野起遺跡で玉が作られていた可能性が高いと言えよう。また、野起遺跡から1km足らずの位置に、玉作集落跡として著名な源訪田遺跡（弥生時代中期）がある。東頸城丘陵の北端部で、円上寺湯に面する地域における玉作の様相などは、今後の調査・研究に期待したい。（胸قه）

## 引用・参考文献

- 朝岡政康ほか 2003 「東圓遺跡 輝光市場建設に伴う市道東8-273建設事業用地内発掘調査報告書」新潟市教育委員会
- 川村浩司 1993 「北陸東北部の古墳出現前後の様相」日本考古学会 1993年度新潟県大会 シンポジウム2  
『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学会新潟大会実行委員会
- 上越市 2003 『上越市史 資料編2 考古』上越市
- 高橋保ほか 1979 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第19 北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡』新潟県教育委員会
- 浅沢規則 2005 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」「シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」「シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」実行委員会・新潟県考古学会
- 土橋由理子ほか 2006 「第V章 正尺C遺跡」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XVIII 馬見坂遺跡 正尺A遺跡 正尺C遺跡』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水井 学 1996 「大武遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成7年度』財團法人新潟県埋蔵文化財事業団
- 丸山一昭 1998 「和島村埋蔵文化財調査報告書第6集 松ノ脇遺跡 一県営圃場整備事業（棚島・原原地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書一』新潟県和島村教育委員会
- 渡邊朋和 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」新津市教育委員会



1. 野起遺跡遠景（東から）



2. 野起遺跡近景（東から）



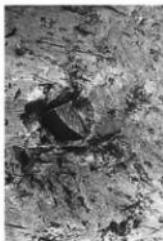
3. 発掘調査風景（南から）



4. 発掘調査風景（北から）



5. 石壺出土状況



6. 磨製石斧出土状況



7. 壺出土状況



8. 高壇出土状況



9. 器台脚部出土状況

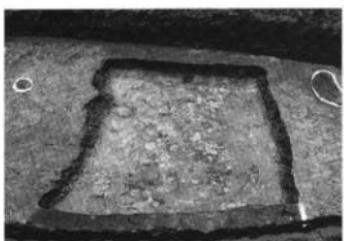
写真1 調査風景及び遺物出土状況



10. 遺構群の状況（21～37グリッド周辺）



11. 発掘終了トレンチの様子（北から）



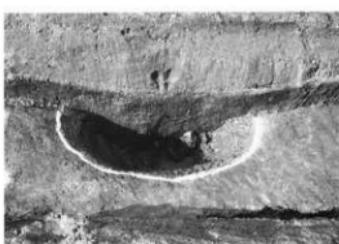
12. 1号溝（西から）



13. 土坑（東から）



14. 井戸発掘風景



15. 井戸（東から）



16. 井戸内の甕・器台・木片



17. 井戸土層断面

写真2　遺構発掘風景

## 報告書抄録

ふりがな	のむこしいせき							
書名	野起遺跡							
副書名	経営体育成基盤整備事業潟地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒形敏朗・加藤由美子・竹部佑介・松井奈穂子							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市鷺原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2008年3月1日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
野起遺跡	新潟県長岡市 寺泊北曾根 1648番地ほか	152021	1257	37° 37° 13°	138° 49° 41°	20071029 / 20071116	110m <sup>2</sup>	経営体育成基盤 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
野起遺跡	遺物包藏地	古墳時代前期		井戸・溝 ピット 土坑		縄文土器・弥生土器 土師器・石器		県内でも珍しい 古墳時代前期の 井戸を検出

### 野起遺跡

—経営体育成基盤整備事業潟地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成20年2月26日 印刷

平成20年3月1日 発行

編集・発行 長岡市教育委員会

印刷・製本 株式会社第一印刷所